

〔訓幼字義〕^五心 凡三十三則

心といふは、人の思慮運用するところをいふも、と別義なし、經書に所謂心といふもの皆此通りなり、後世に、心に體用をたて、一念未發の所を心の體とし、思慮運用するところを心の用と云、宋朝以來の説にて、聖人の意にあらず、聖賢の所謂心は皆已發に就てをしへをたてられたるものにて、詩書六經以來、一句も未發の心をのたまふことなし。

〔辨名〕^下心、志、意 ^{九則}

心者、人身之主宰也、爲善在心、爲惡亦在心、故學先王之道、以成其德、豈有不因心者乎、譬諸國之有君、君不君、則國不可得而治、故君子役心、小人役形、貴賤各從其類者、爲爾、國有君、則治、無君、則亂、人身亦如此、心存則精、心亡則昏、然有君而如桀紂、國豈治哉、心雖存而不正、豈足貴哉、且心者動物也、故孔子曰、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其鄉、惟心之謂與、是言雖操則存、操之不可久、不得不舍、舍則亡、操之無益於存也、何則、心者不可二者也、夫方其欲操心也、其欲操之者亦心也、心自操心、其勢豈能久哉、故六經論語皆無操心存心之言、書曰、以禮制心、是先王之妙術、心不待操而自存、心不待治而自正、舉天下治心之方、莫以尙焉、後世儒者僅知心之可貴、而不知遵先王之道、妄作種種工夫、求以存其心、謬之大者也、學者思諸。

〔石田先生事蹟〕行藤氏問、心と性と異なりや、

先生梅巖石田 答て曰く、心といへば、性情を兼ね、動靜體用あり、性といへば、體にて靜なり、心は動ひ

て用なり、心の體を以ていは、性に似たる所あり、心の體はうつるまでにて無心なり、性もまた無心なり、心は氣に屬し、性は理に屬す、理は萬物のうちにこもりあらはる、事なし、心はあらはれて物をうつす、又人よりいふ時は、氣は先にして性は後なり、天地の理よりいふ時は、理あつて後に氣を生ず、全體を以ていふ時は、理一物なり、理の萬物のうちにあつて、あらはれざる事を譬